

<今回>362回目 2024年12月23日(月)14時10分～17時 602会議室

読書は3冊目「盗まれた神話」朝日文庫版 p33 不透明の霧 より

<前回>361回目(24-12-28)出席者9名

資料1)第360回(24-11-2)のまとめ(清水)

2)吉武高木遺跡(高山)

A 報告 岡田氏は欠席だが、関東旅行は参加され、元気だったそうだから体調面は心配ないだろう。前回は議論風発で読書ができなかったから、出来るだけ読書を進めたいと思い次回まわしにした高山氏の資料から始めた。

B 資料 吉武高木遺跡 位置関係図、室見川と日向側の合流平地、特に日向峠の看板の文字を読み取る苦勞、甕棺墓、木棺墓、副葬品、甕棺ロード(三内丸山や吉野ケ里遺跡にもあり)大石遺跡には戦死者と思しき人の集団墓地あり、推定年代が示された。

北部九州の主要な遺跡年代の推移がわかりやすく纏められている。①須玖岡本遺跡の「巨石下甕棺墓」奴国王の墓か、②三雲南小路遺跡は細石神社の裏にあったという。伊都国王の墓か、神社が先か墳墓が先か、墳墓が先、③井原鍵溝遺跡、青柳種信の調査記録しか残っていない。前漢鏡21面の出土記録、④平原遺跡は1965年原田大六が発掘した。46.5cm径の銅鏡5面を含む40面の破鏡、(最近の関西服部静尚氏の水素原子蒸発による自然破壊説が出た)破鏡、破銅鐸は人工か自然か。ヒスイの糸魚川出土勾玉、碧玉の菅玉の加工方法(穴あけ技術)について貝汁の溶解説も出て、まだ時間切れを起こしそうになった。

C 読書 P20 第2章 戦後史学への批判

- 1) 根本の問い 津田左右吉は戦前の皇国史観一色の中で、学者として記紀の不合理的な記述に対する勇気ある抵抗姿勢に対して、戦後の学界からの評価が一変し、戦後定説の出発点になった。
- 2) その出発点は宋書の倭の5王の比定問題が活発に論議され、応神仁徳から雄略までの諸天皇に当て嵌めようとしたものである。宋書に示された一部系図が似ていることから議論されたが、記紀と内容が全く似ていないというより、別物である点(長い將軍名、緊張感あふれる、倭王武の上表文、高句麗好太王碑文)が抜けている。今でも私はそれを認めない立場だとわざわざ言う文献学者がいる(八王子セミナー)。記紀の、のどかな文章と緊張感あふれる海外史料は戦後史学者らがまだ何も見ていないことを現している。
- 3) 戦後史学の割り切り 津田史学の基本的命題 記紀の記事は原則として信用できない。だから一致しなくても、差し支えない。一致するところだけ採用すればよい。(これは江戸期の医者、松下見林と同じ考え方だ。(然し松下見林も系図だけ似てるからと云って倭の5王を紀の天皇には当てていない))
- 4) 古田武彦の疑問 当時の記紀の編纂者とその周辺には、倭王武の上表文の起草者や中国に派遣された関係者は全くなかったのか。そんなことはない(記紀はその時の史料事実として残っているものを、活用していた、創作したしたものはない。継体死亡時期の表現を見よ)

次回は第2章から。

第362回 2025年1月13日 14時10分から17時まで 601会議室

第363回 2025年1月27日 14時10分から17時まで 602会議室